

世界の製薬企業が東南アジアで動植物や微生物の収集に力を入れている。新薬原料の七割が由来するとされる生物資源が現地の熱帯雨林に豊富に存在するためだ。

英グラクソスミスクラインは一九九三年、シンガポール政府と共同で同国に天然物研究センターを設け、東南アジア各国の生物資源を集めてきた。メルクやデンマークのノボザイムも収集に取

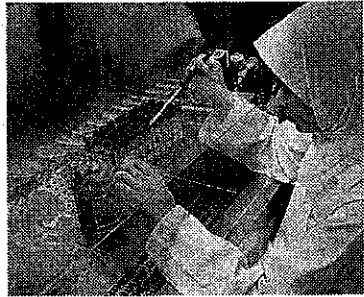
### 新薬原料は熱帯雨林に

## 世界の製薬企業も注目

り組んでいる。藤沢薬品工業も二〇〇〇年末からマレーシアの政府系企業などと共同で土壌や落葉を収集し、日本で分析し

・精製する企業も登場した。バイオベンチャーのニムラ・ジェネティク

・ソリューションズ(東京・渋谷)は二〇〇二年



クアラランブルにあるニムラ・ジェネティクの研究所は微生物のバイオ応用に取り組む

始めた。エーザイはインドネシアで植物の抽出物を研究している。土壌微生物が生成する化合物を現地で抽出

## 生物資源を収集・分析

三月、マレーシア森林研究所(FRIM)と微生物の探索で契約を交わした。

同社はFRIMに技術指導し、商品化した化合物や知的財産権を製薬企業などに販売する。FRIMには利益の一定割合を支払う。現地在住十四年の二村聡会長は「マレーシア政府からの信頼が最大の武器」と話す。

(クアラランブル)

山崎淳弘